

胎児の 人権宣言

TOKYO 1991

前文
人間ひとりひとりが、受精の瞬間から自然死にいたるまで、生来の尊厳と固有の価値を有するので、今日我々は公けに以下の六ヶ条の宣言に同意する。

第一条
我々は、胎児ひとりひとりが、受精以後の発育のすべての段階において、人間であるという科学的事実を確認する。

第二条
我々は、本宣言に定められている権利を、人種、胎児年齢、性別、国籍、宗教、社会・経済的出自（生まれ）、障害の有無、その他のいかなる理由によっても差別することなく、尊重する。

第三条
我々は、胎児が、1948年の国連の人権宣言に述べられている胎児以外のすべての人間の基本的権利と同様の権利を有することを確認する。我々は、この権利が立法によって認められることを要求する。

第四条
我々は、胎児ひとりひとりが良好な胎内環境で発育する権利を有することを認める。この環境には出産までの母親の適切な保護と両親への支援を求める権利が含まれなければならない。

第五条
胎児が、受精の時から、科学的、医学的、または医学的実験や利用に供されない権利を有することを確認する。ただし、この実験や利用が胎児に直接役立つ場合を除く。

第六条
我々は、胎児の発育とそれに関する諸問題についての科学的事実の教育の推進に努める。また我々は、女性が子どもを産み育てるのを難かしくしている社会的、経済的ならびに法律的諸条件の改善に努める。

結び
以上にかんがみ、我々はすべての国際団体、政府、組織、ならびにすべての善意の人々が、ここに含まれる各箇条を公認し、実行するように強く奨める。



7月13日は
日本の
生命尊重の日

【幼児】について考える

カトリック教会における幼児

古来カトリック

教会は、洗礼を受けられた幼児を教会の正式の構成メンバーと考えてきた。

非カトリック・キリスト教諸教団の中には、教会の構成メンバーを、自覚的に信仰をもち、洗礼を受けた「成人」だけだとし、幼児を教会の成員と認めていないものもある。

で、幼児を教会の一員とみなし重んじていることは、カトリック教会の特色の一つと言える。

カトリックの信仰は幼児をどのようなものと考えているのであろうか。教会の幼児観は、幼児のもつ将来性と

現在性とを手がかりに、以下のように整理できよう。すべての幼児においてこの両面が認められるが、両者は相互に密接に関連している。

なお、これらのことは、必要な変更を加えれば、「児童」あるいは「子ども」一般にも当てはまる。

一、将来性をもつが現在には未熟で無力で不完全

第一の面は、ほとんどが、カトリックの信仰をもたない者にも理解でき、現に、大体、認められてもいる内容である。将来性をもつが現在には不完全な存在だということである。幼児は生存し成長していかねばならない、無力で未熟な段階の人間であり、大人の自己犠牲による全面的助けを必要としている弱者である。

A 大人に依存する無力な存在

生存や発育のために、全面的に大人による養育と保護と配慮を必要としている、弱者である。さまざまな基本的な必要を抱えており、自分のためになる一切の「善いもの」を大人を通してしか手に入れることができない（マルコ10・13）。例えば、洗礼の秘跡や他の諸秘跡によって教会の豊かな神のいのちに与らせようとするのも、幼児のために祈るのも、超自然的な神の恵みが幼児の幸せのため、にどれほど重要かを理解している大人たちである。

B 大人の自己犠牲的な愛が不可欠

幼児の世話や配慮は、大人にとつては自己犠牲となる。自分の時間や労力や安楽や財産をさして幼児のために使わねばならないからである。その幼児に対する愛に動かされた大人が、これを引き受けるのである。幼児は生存のためにも健全な成長のために、ある大人から自己犠牲的な愛を注がれることが必要であり（ルカ8・40-42、49-56、マルコ7・25、9・14-29）無関心や冷淡の中に放置され、愛の対象にされない幼児は悲惨である。教会は伝統的に、幼児の重要な環境としての家庭の意義を強調し、両親の責任の自覚を促す一方、幼児福祉施設事業にも力を入れ、さらにこの観点から里親・養子制度にも関心を示してきた。

C 発達し成長すべき将来性をもつ存在

幼児の身体は、大人になるように発育していく。発達途上にあり、その段階に応じて、心理的・精神的・情緒的・社会的にも成長していかねばならない。幼児は、人格存在としての形成へと方向づけられている、未熟な段階の人間である（1コリント13・11）。幼児は教育を必要とし、大人によって導かれ助けら

れなければならぬ（コロサイ3・20-21、エフェソ6・1-4、1テモテ3・4-5などを参照）

存在である。信仰生活に關しても無論そうで、幼児は受洗後能力的に発達するに依じて教会の中に深く組み込まれていき、信仰者としての洗礼の恵みにふさわしい応答ができるようになっていくことが希望されている。

D 大人の罪の犠牲になる危険

幼児が弱者であるため大人の罪の被害者にされる危険が非常に大きいことも、カトリックの信仰の立場からは無視できない重大な問題である。わが国にも子どももの権利と福祉を守ろうと誓った児童憲章（昭和26年制定）はあるが、国民の遵守への熱意はそれほど高くない。最近、親による子ども虐待が話題になっているが、今始まった話ではなからう。自分の

野心を満たすための手段として、自己中心に幼児を育てる親も多い。

人類の歴史を見ると、無数の子どもが戦争、貧困、病氣、遺棄の犠牲になってきているが、事情は今も変わらない。近年における生殖補助医療の盛隆の中にも、大人が自由にデザインして製品としての子どもを得ようと熱中する「子作り」、という子ども的人格支配の罪が見え隠れしている。昔から幼児売買は多いが、最近は移植臓器として販売するために幼児の臓器を狙うブローカーもいるらしい。

カトリック教会は、あらゆる不正な幼児支配を神に敵対する重大な罪と考え、その防止に力を尽くそう、と信者だけでなく世界中のすべての善意の人々に呼びかけるのである。（続く）

富川 俊行
（カトリック長崎教区報）

【言の波 #9】より転載）

末期中絶議論に拍車

英国で公表された研究は、胎児が20週目ですでに痛みを感じ、可能性を示唆するものであり、それは早産児に対する医学的手順について懸念を巻き起こし、末期中絶反対派を勇気付けるものとなった。

「この研究は、中絶の恐ろしさを強調するものである。」と、リクレイミング・アメリカ・センターのクリスティー・ハムリックは権威をもって述べた。このセ

十代の性 (34)

質問：私は17歳の時に中絶をしました。それ以来、私はまったく別人になってしまいました。その恐ろしい日以来、ずっと苦しんできました。私に心のやすらぎを見いだせる日は来るのでしょうか？



平和を破壊するいちばん恐ろしいものは墮胎です。なぜなら、子どもを殺すのはその子の母親自身だからです。…若い女性達は両親を恐れ、世間の人々を恐れるあまりに、墮胎することがよくあります。でも彼女たちを助けなければなりません。

(マザー・テレサ)

(2ページから)

インターは、来週他の人権擁護派団体と共同で、会期中の議会前で未期中絶禁止を求めるキャンペーンを行うことになっている。

報告によると、政府に指名された英国エジンバラ大学の医学研究評議会の会長は、「胎児は24週目で確実に痛みを感じるようになっており、もしかしたら20週目でもそうになっているかもしれない。」と語っている。それは以前から認められている26週よりはるかに早いものである。

これらの結果から、初期段階にある新生児、つまり長期的発育に影響を及ぼすかもしれない数々の医療手段で痛みを味わうことになり、かもしれない彼らの扱いについて

答え：中絶のトラウマで苦しむ女性を助ける海外のプログラムの中には、以下のようなことが勧められています：

- 一、自分が過ちを犯したことを認め、自分の子どもを殺したことを認めること
- 二、自分の子どもを死を悲しめるようになること
- 三、神の許しを求め、それを受け入れること
- 四、いのちあることに感謝をし、常にいのちを大切にすることで過去の埋め合わせをすること

で、更なる研究が必要であることが明らかになった。そしてその研究は、一体どの初期段階にある新生児の誕生に際して麻酔をかけるべきなのか、あるいはかけるべきでないのか、という疑問を投げかけたのである。

だが、この研究は同時に中絶、特に末期段階における中絶をする権利に関する議論に、新たな拍車をかけるものでもある。

ハムリック氏は、生命は妊娠した時点で始まるものであり、それ以降守り続けなければならぬものと信じているが、エジンバラの研究は彼女の根拠を単に支持ものでしかない主張する。

「これは、激しい変動（妊娠から出産まで）の過程（）のどの時点

こうすることで初めてあなたは心のやすらぎを見つけることができるでしょう。もしあなたの住む地域にまだこのような女性のための支援グループが存在しなければ、同じような苦しい経験を持つ人々を集めてあなたが始めればよいのではないのでしょうか。もしかしたら、ある日、そのような支援を必要とする人たちのための施設をもてるかもしれませんよ！



であれ）において、それでもやはり人間であるという事実を変えられないものではない。」と彼女は言う。「しかしこの情報は、私たちの国がどのように線引きをするべきかについての意見の一致をもたらずのには役立つであろう。」

妊娠期間中のどの時点における中絶も、米国では連邦法で合法とされている。しかし中には、パシヤル・バース・アポーションを禁止する試みをしている州もある。これらの禁止は最高裁でもうまくチャレンジしている。

連邦政府のパシヤル・バース・アポーション禁止については、上下院とも2回通過しているが、大統領の拒否権を覆すには及ばなかった。クリントン大統領は、この法案をいずれも拒否している。

二〇〇〇年の大統領選の際に末期中絶禁止法に署名すると語っていたブッシュ大統領は法案が手元に届きさえすれば署名してくれると確信している生命擁護派の活動家たちは、最後の戦いに向けて調整を進めている。

一方、女性のための国立機関、国立中絶・生殖権利活動連盟及び家族計画連盟などの中絶権利団体は、末期中絶禁止に向けた前進は、どんなものであれ、画期的なロー・ウェイドにおける最高裁判決、つまり中絶を規制ま

たは禁止する個々の州の権限に制限を与えたもの、の破棄に一步步近づくものだとしている。

中絶を行う医師たちのネットワークである国立中絶連盟のスーザン・ダドリー医師は、胎児の痛みは非常に複雑な問題であり、とても完全に理解できるものではないと語る。

「胎児が痛みを感じるかどうか、それが26週目であろうと20週目であろうと、あるいはさらに早い段階であろうと、今日の中絶の大部分は妊娠初期の段階に行われているのであり、NYPN（国立中絶連盟）のような団体は、今後もこの権利を支持していく構えである。」と彼女は語った。

「明らかになっている最も重要なことは、ほとんどの中絶が20週目を迎える前に行われているということである。」とダドリー氏は言う。エジンバラ研究が正確だとしても、「中絶について真剣に考えている人々に対してはほとんど影響を与えることはないだろう。」としている。

国立健康統計センターの最新のデータによれば、全米で一三〇万人の人が一九九七年中に中絶を受けている。

ケリー・オ・ヒューカー



会員募集

寄付: 十万円 五万円 三万円
一万円 五千円 一千円

あなたの寄付はまだ生まれていない赤ちゃんを守る運動のため使用させて頂いております。私たちと一緒に小さいいのちを大切に育みましょう。

御送金

銀行: 四国銀行朝倉支店

口座番号: 0573553

日本プロ・ライフ・ムーブメント

郵便局: 「郵便振替」

口座番号: 01660-5-39607

日本プロ・ライフ・ムーブメント

事務所便り

アメリカのイラクへの攻撃がとうとう始まってしまいました。戦争がなければ未来ある若者として生き続けたであろう彼等のいのちを奪い、両方に死者を出すような戦争を私たちはどうして止めることが出来ないのでしょうか。特に、政治的に翻弄される貧しく、弱いイラクの子どもたちと女性たちの上に一日も早く平和が訪れますようにと皆で祈りを強めたいものです。

今月号は、5月の母の日と6月の父の日、そして、7月13日の日本の生命尊重の日にあわせたもの、子どもにも焦点をあわせました。子どもは私たちの未来！子どもがいなくなったと少子化の問題が取り上げられて久しいのですが、一向に良い方向に向かっていないようです。

また、10代の中絶はとまることを知りません。私たち大人が戦争を行い、いのちの大切さを示さない社会の中で育つ今の若者が、戦争する大人の姿を反面教師に育って欲しいと望みますが、彼等の中にもいのちへの思いが鈍感になってきていないでしょうか。おなかの中の赤ちゃんにも私たちと同じいのちがもう芽生えています。

『いのちの教育』に関する記事を書いて頂けませんか。私たちの『日本プロ・ライフ・ニュース』をできる限り日本人の方々の記事で満たすことができればと思いますが、それは一人一人の皆様のペンを取って下さる御協力にかかっています。いのちの教育の体験談、いのちの教育に望むことなど、日頃御考えの事を文章にあらわして是非お送りくださいますようお願い致します。

また、公立の学校へこのプロ・ライフ・ニュースを送り続けることが出来ますように皆様の金銭的御支援をどうか宜しくお願い致します。

(日本プロ・ライフ・ムーブメント)

子どもへの強い影響力

父親の愛、もしくはその欠如が、母親の愛と同じくらい子ども的人格形成や行動に影響を及ぼすとの調査結果が出た。ある意味、父親の愛がより影響力が大きいとの見方すらある。

この調査結果で、おそらく最も重要かつ驚くべきは、一部調査では、母性愛の影響に全く触れられていない点だろう。子どもの心理・行動面での成長に対する両親の教育の影響について、欧米諸国の約100の調査結果を収集・分析した。古くは一九四九年から、最新では二〇〇一年の調査までを含む。

自覚の有無を問わず、子どもが父親に受け入れられているか、または拒絶されているかは母親がいるかいないかと同じくらい、その子の成長に深く影響を及ぼす。

父か母どちらかの愛を得られなかった場合も、子どもは自信喪失・情緒不安・引きこもり・抑うつ状態に陥りやすい。さらに成長するに従って暴力・麻薬・飲酒・犯罪などに走る危険性も、両親から拒絶された子どもに共通して見られる。

両親からの愛情と教育は、どちらも等しく早い段階から子どもの幸福・精神状態・社会や学校における成功などに好影響を与えるともされる。

しかも、場合によっては母親よりも父親の愛が、より大きな役割を果たすとの分析もある。子どもの性格・行動・犯罪・

いじめや虐待等の問題に至っては、父親の愛情いかなのみによって発生するという意見も多い。

調査隊の意図は、母性愛が父性愛ほど重要でないと言いたい訳ではない。育児において母親の役割ばかりが過度に強調される社会の偏見を指摘し、父親の役割も同じくらい大切であるとの理解と認識を深めたいのである。

父親の愛がとりわけ強い影響を与える面も少なくない。子どもの成長における諸問題は、すべて母親のせいだと決めつけて非難(バッシング)するのは終わりにしなければならぬ。そして幸いなことに、今回の調査で得られた情報は、もっと子どもと接していくべきであると、世の父親達を励ますことにもつながる。

「General Psychology」(総合心理学)
2001年12月号 5: 382-405より抜粋